

「全鍍連」 2022年 8月号 巻頭言

全鍍連 技術副委員長 小杉 亮 (旭産業(株) 代表取締役社長)

「様々な分野に貢献」



全鍍連の皆様 健康に暮らしているでしょうか？小生は大分メタボリックに成ってしまいました。神奈川県メッキ工業組合では 副理事長 技術委員長 そして全鍍連では技術委員会副委員長の職を担当しております。このめっき業界には色々な専門分野が多種多様に存在している事は皆様周知の事と思います。太平洋戦争後 めっき工場は徐々にその数を増して行きました。金属の上に銅・ニッケル・クロムめっき、亜鉛めっき、硬質クロムメッキや その他様々な種類のめっきが開発され工業会や自動車業界の発展とともにめっき業界も追従して行きました。50～60年程前にはプラスチック上のニッケル・クロム等のめっきが盛んになりその後はその技術の応用としてプリント基板のスルホールめっきが盛んに業績を上げていました。そしてフープにもめっきが付けられるようにもなりました。この様に1970年代は大量生産の時代であり、1980年代では電子・電気分野の成長とともに多様化が進み 1990年代には多品種少量の時代となりめっき技術の専門化が進みました。そしてめっき工場が海外進出して行きました。2000年代に入ると環境規制強化により外製化により進み海外の低価格めっきに依存する様になって行きました。2022年4月1日現在全鍍連組合員数は1192社となり、減少傾向に歯止めがかかっておりません。最近では高機能めっきが新しい分野を支えつつあるように思います。技術力の高いめっき会社が台頭する時代へと変わってきました。ただ大きく発展した分野にも衰勢が有ります。50～60年前ボウリングが流行りそこら中にボウリング場が乱立した時代が有りました。有る時から下火になり多くのボウリング場が消えて行きましたがまだ今でもボウリング場は有るのです。このようにプラめっきは海外に出たものの未だ国内でも仕事を続けている企業も多くあります。プリント基板スルホール銅めっきも海外に進出しましたが国内に元気な企業が多く残っています。めっきは多くの分野に貢献しています。まだまだ皆さんの会社が出来る仕事は沢山あると思います。1990年代に比べるとめっき業界の企業数は約三分の一程度になってしまいましたが、従業員数はそれほど多く落ち込んではいないようです。環境規制をクリアするには零細企業はとてよって行けない事もあるでしょう。環境に順応して行くには企業の体質を強固にして行く必要が有ると思います。その為には技術職の人だけではなく一般のワーカーの社員達もめっきに対する知識を深める必要が有ると思っています。めっきの講習会は余り数多くは有りません。そこで電気めっき検定による国家資格を取得する事によりめっきの基礎知識を身に付ける事、そして全国めっきコンクールに出品してめっきの奥深さを体験する事によって知らないうちに技術が向上して行くことになると思います。社員のめっき技術力を上げることで会社全体が良い方向に向かって行くように思う訳であります。どんな良い設備もめっきの原理を応用したものです。今や装置産

業と化してしまったように感じているところもありますが、ひとつひとつ手作業で無ければ出来ないような仕事も沢山有るのがこのめっき業界だと信じています。生活必需品から機械部品や航空機、船舶、その他どのような物にも欠かせないのが我が業界のめっきなのです。まだまだ新しい産業が増えていくことでしょう。それに追従していくのが我が産業でありこれからもめっき業は絶対に世の中に必要な産業と信じています。